

トンガにおける女性の地位

大谷, 裕文
西南学院大学文学部

<https://doi.org/10.15017/2244054>

出版情報 : 九州人類学会報. 17, pp.65-73, 1989-10-23. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :



トンガにおける女性の地位

大 谷 裕 文

I はじめに

「トンガは女性の地位の高い社会である」という常識は、1806年から4年間、トンガ諸島に滞在したイギリス人 William Mariner (1791～1853) の報告以来、¹⁾ 広く欧米の社会に定着していった。Mariner の報告は、印象のレベルに止まっており、女性の地位の高さの意味は言及されていない。トンガの女性の地位について19世紀末までに出版された文献の多くも、印象に基づいた記述であり、Mariner の報告を凌駕するものではなかった。ただ、トンガについて書かれた文献の多くが、女性の地位の高さに言及しているので、少なくとも印象的には、トンガは女性の地位の高さを感じさせる社会であったと言うことはできるであろう。

「トンガにおける女性の優越」に関する分析的研究は、20世紀に入ってから、Gifford、²⁾ E. Bott、³⁾ S.Korn、⁴⁾ G.Rogers⁵⁾等によって、親族組織研究の枠組の中で展開されていった。これらの研究者は、親族組織の内部での女性の位置づけを詳細に記述し、女性の儀礼的優越と政治戦略上の価値を正しく指摘していたのであるが、全体的な民族誌の作成や親族組織の分析自体に記述の焦点が置かれていたので、男女の役割分担や女性の文化的意味までも包摂する特定の・主題的な女性の地位の研究にまでは至らなかった。

トンガの女性の地位に関する特定の・主題的な研究は、Bradd Shore のサモアにおける女性の地位の研究や⁶⁾ Sherry Ortner のポリネシア一般における構造論的なジェンダー研究⁷⁾の後に、近年になってようやく C.W.Gailey⁸⁾によって開始されたが、Gailey の関心は、階級の生成を構造的契機とする国家の形成とそれに伴う女性の従属化のプロセスの分析にあるので、男性と女性の分類体系やジェンダーの象徴的意味の分析は、Gailey の著作には全く欠落している。このような状況の中で、現在、トンガのジェンダーに関するより全体的な研究が求められていると言えるであろう。

本稿は、より全体的なトンガのジェンダー研究への予備的考察として、トンガにおける女性の地位を、歴史によって生成される「客観的」意味連関の構造を背景としながら、ジェンダーをめぐる分類体系の中に位置づけることをその目的としている。なお、本稿の内容は、1988年12月の九人研例会で発表した要旨の一部を補足・修正したものである。

II tu'unga

先に述べたように、現在、ジェンダーの非対称性を社会・経済的な地位・役割の分析を通して解明していこうとする試みが、ジェンダー研究の支配的なトレンドの一つとなっているのであるが、本稿においては、「地位」という用語を地位・役割理論における「status」ではなく、トンガ語の tu'unga の訳語として使用することにしたい。tu'unga は、様々なコンテクストにおいて、特定の場の中での個物と個物の相対的な関係を表現する空間的なメタファーである。Kauhalalalo (海側) / Kauhalauta (陸側)、taulalo (下位) / funga (上位)、Kolo (村) / Uta (叢林)、to'omata'u (右) / to'ohema (左)等の対立における一方の他方に対する関係は、tu'unga で

あり、この意味において、tu'unga は、固定的なポジションを示す ulu'itohi とは異なっている。

コンテキストによって相対的かつ可変的な男性と女性の関係も、tu'unga ko 'ete tagata pe fefine (男と女の関係) という慣用表現にみられるように、tu'unga によって表現される。この意味での tu'unga は、トンガの人々の生活、世界の種々のディスコースにあらわれてくるが、ここでは3つの主要なコンテキスト、即ち ㊦ mohenga、㊧ toto (血、親族)、㊨ lolenga について、各コンテキストにおける tu'unga の意味を検討していくことにしたい。

III mohenga

トンガには、性的交渉を意味する語が幾つかあるが、これらの中でも mohenga (寝床) は一般的によく用いられる語である。より直接的な表現としては tau があり、スラングに近い語としては fai がある。mohenga をめぐる多種多様な語りは、共同労働集団 (kautaha) に属する男の打ち解けた集まりや民衆レベルのカバ・セレモニー (fai kava) 等の場で聞くことができる。トンガの人々の思考様式の中では、mohenga は loto の領域に属する行為と考えられている。loto は anga との対照において意味をもつ語であるので、次に anga / loto の区別に言及しておくことにしたい。anga は、規範、慣習、制度、方法、定型化された行為を意味し、ポジティブな価値が与えられている。また、anga は、他の語と結合して、多くの複合語を構成する。angafai は、生活の様式を意味し、「文化」に最も近い語である。puleanga は、pule (統制) + anga であり、政府を意味する。katoanga (祝祭) は kato (食物や飲み物をいれたかご) と anga からなる複合語である。anga にはポジティブな価値が付与されているので、angalelei (よい行い)、angamo'oni (誠実な行い)、angama'u (おちついた態度) などトンガ文化のコードと一致した語が多く見いだされる。この点は、anga fai pau ki 'ete tui (正しいと信じられていることを行え) などの多用されるイディオムについても言えることである。しかし、angakovi (悪しき行い)、anga-kaiha'a (不誠実な行い)、angahia (罪)、angamaka (強情)、anga-fakafasifasi (邪悪な行い) などのネガティブな表現も可能である。この場合、文化コードからの逸脱あるいは秩序からの排除が強調されていると言えるであろう。

一方、loto は、共同労働集団のインフォーマルな集いや faikava において、anga と対照をなして語られる。loto は、本来、窪みや空隙を意味する語であるが、情動、欲望、感情、心等の派生的意味ももっている。loto も、anga と同様に、多くの複合語を構成する。しかし、これらの複合語の多くは、anga と異り、lotokovi (悪しき感情)、lotohe (まぬけ)、lotovale (無知)、lotofoi (恐怖) などのようにネガティブな価値と結びついている。とはいえ、語の用法としては、lotolelei (善良)、loto'ofa (愛情) などの肯定的表現も可能である。いずれにしても、loto の意味の生成は、コンテキストに依存しており、anga との対立においては、それは無秩序および周縁的な事象を象徴することになる。

loto は、胸の中央に宿ると考えられており、それが宿る場は1つの空隙のイメージでとらえられている。トンガにおける個人 (tokotaha) の概念は、欧米の self の概念とは非常に異っている。tokotaha は、他者とは相対的に区別される存在ではあるが、欧米における伝統的な self の概念のように、それ自体が内的統合性をもった実体としては考えられていないようである。tokotaha は、

外部の諸力に支配されており、lili（怒り）、'ofa（愛）、manako（性的欲望）などが外から tokotaha の中に入り込んでくる。loto が anga と対照的に語られるときには、loto は以上のような外的諸力の総称的なカテゴリーとして使われていると言える。トンガにおいては、無責任な結果、好ましくない事態をまねいた場合、それを 'alunga（なりゆき）によって説明することがよくみられるのであるが、こういった現象も外的諸力に動かされる個人という表象と密接に関係している。このように見てくるならば、anga と loto は、統制／非統制の対立と相即的であり、その意味においていわゆる自然と文化の対立と部分的に重なると言えるであろう。

性的交渉（mohenga）は、loto のカテゴリーに属しており、攻撃性と個人的な情動と強く結びついている。トンガでは伝統的に、処女性に高い価値が与えられ、高位の首長の娘は厳しい tapu（タブー）に囲まれていた。とりわけ、神聖王ツイ・トンガの姉妹の娘である Tamaha は、未婚の女性の処女性に関する文化モデルの中心に位置していた。神なる王、Tui Tonga のタイトルは、1865 年に廃絶され、Tui Tonga の神聖性は、象徴的操作によって現在のトンガの王家、Tupou 王朝に帰属せしめられていったので、現在では Tamaha は制度上は存在していない。しかし、Tamaha に聖性と至高の地位を与えていた親族の原理それ自体は現在でも存続しており、Tamaha に具現されていた処女性のモデルは、親族の原理を媒介として現在の王家を中心とする世界観の中に変換された形で生き続けているといえるであろう。

処女性に対する高い価値づけは、王家や貴族層においてのみならず、tu'a（民衆）のレベルにおいても、核家族を基礎として構成されている社会生活の基本的な単位 'api やその中に複数の 'api を包摂する親族集団 famili の枠組の中に明確に認められる。

IV toto

'api および famili の中には、個人の格づけ（個人の地位）に関する明確な規範が存在している。兄弟（tuonga'ane）と姉妹（tuofefine）の関係においては、姉妹が兄弟に優越する。同性のシブリングにおいては、年長者が年少者に優越する。親子関係に関しては、子供は両親に従属し、さらに夫と妻の間では、一般に前者が後者に優越する。また、父の兄弟は、父と同じカテゴリーに属しており、兄弟の子供に対しては、父と同様に支配的な地位に立つことになる。父の姉妹は、姉妹の優越の原理に基づいて父よりも高い地位をもっており、mehekitanga と呼ばれて特別な尊敬が与えられるべき存在と考えられている。このような格づけそれ自体は、あくまでも規範の体系であり、「言われること」の次元に属している。したがって、それは、現実の行為の次元と常に一致しているわけではないことに注意せねばならない。

'api および famili の中において、個人は相互の地位の関係性に基づいて、コンテクスチュアルに、一定の権利と義務ならびに tapu（タブー）の意味連関の下におかれることになるが、当面の行論では、tuonga'ane（兄弟）－tuofefine（姉妹）、tamai（父）－ta'ahine（娘）、mehekitanga（父の姉妹）－ilamutu（姉妹の兄弟の娘）の3つの主要な関係が関与的である。tuonga'ane と tuofefine の間には、古くから多くの人類学者が brother-sister avoidance の典型的な事例として取り上げてきたように、伝統的に厳格な tapu がみられた。tapu の本来の意味は、「印づけること」であると考えられるが、結果として、それは、「客体化」された具体的な行為の禁止を

も意味している。そこで、tuonga'aneとtuofefineの間のtapuは、「両者は一緒に食事をしてはいけない」、「両者は互いに並んで座ってはいけない」、「お互いに体に触ってはならない」、「tuonga'aneはtuofefineの居場所に一人で立ち入ってはならない」といった一連の行為の禁止として語られる。こういった禁止に加えて、tuonga'aneは、tuofefineに敬意を払い、tuofefineの処女性(taupouu)を保護する義務(fatongia)をもっている。tuofefineがデートをしているとき、数十m後から兄弟の一人が忍耐づよくtuofefineの行動を監視している光景がよくみかけられる。また、12～14歳位の少年がこの監視役を命じられることも珍しくはない。こういった行為は、tuonga'aneのtuofefineに対する当然の義務と考えられている。ところで、tuonga'aneとtuofefineの間のtapuは、伝統的には厳しいものであったが、近年、禁止される行為の範囲と強制力に若干の変化がみうけられるようになった。たとえば、tuonga'aneとtuofefineが、並んでバスの座席に座り、ヌクアロファの町にでかけていくといった光景も最近では珍しくなくなってきた。また、tuonga'aneがtuofefineのハンカチやサイフなどの持物を借りて外出することも、逸脱とはみなされなくなっている。しかし、こういったtapuの範囲と強制力にみられる変化にもかかわらず、tuonga'aneがtuofefineを保護するfatongiaを負っていることには変りはない。

tama-ta'ahineの関係については、両者間のtapuの関係と社会的関係とを区別する必要がある。tapuの関係に関しては、一般的に、tamaはta'ahineよりも個人の地位が高く、後者は前者に対して服従の意を儀礼的に表現しなければならない。ta'ahineはtamaに対して敬語を使用せねばならない。また、ta'ahineがtamaの体に触れたり、tamaの居住空間に許可なく入ったりすることはtapuである。しかし、入念に構成された婚姻連帯の結果として、王家や高位の首長の間では、かつてのツイ・トンガの姉妹の娘(tamaha)とその父の関係のように、tamaの個人的地位がta'ahineのそれよりも下位にあることもある。このような場合、tamaはta'ahineに対するtapuに束縛され、少なくとも儀礼的には従属の表現を求められることになる。個人的地位に関して、tamaがta'ahineに優越する場合も、あるいは両者の関係が逆転する場合も、いずれにおいても、ta'ahineがtamaの前で性的な話題を口にすることはtapuとなっている。また、ta'ahineとtamaの間のtapuの関係がどのような規定をもっていようと、それとは別に、両者間の社会関係は独自のfatongiaを含んでいる。tamaは、ta'ahineとの個人の地位をめぐる関係如何によらず、ta'ahineの処女性の保護・監督及びこの問題をめぐる様々な意志決定をおこなう義務を負っている。ta'ahineの処女性の保護・監督に関しては、tamaとともに、父の姉妹、mehekitangaが重要な役割を果たしている。mehekitangaと兄弟の子供との関係は、fahuと呼ばれ、前者は後者に対して特別の尊敬(fakaapaapa)を求め、金品やサービスを要求する権利をもっている。それとともに、mehekitangaは、兄弟の子供の順調な成長に責任をもっており、教育、結婚、出稼等、人生の節目節目における重要な出来事に関して、mehekitangaの意向は重要視される。ta'ahineの処女性の保護・監督に対するmehekitangaの関与も、このfahuの関係に基づいていると言える。

以上のような処女性(taupouu)への価値づけは、一つの文化モデルと考えることができるが、ここでpracticeの次元にも目を向ける必要がある。一方では、taupouuを強調する文化モデルがあり、今日では、教会がそれをサポートしている。しかし、他方では、未婚の男女間のmohengaが頻繁に見られる。特に、トンガの青年(tamasi'i)にとっては、性的アヴァンチュールは生活の重

要な部分となっている。トンガの青年は、tapu の壁を越えて、taupoou を獲得することに並々ならぬ関心をもっている。taupoou の獲得は、トンガの青年にとっての名誉であり、一つの武勲と考えられている。逆に、姉妹が taupoou を奪われた場合、それは famili にとって大変な不名誉であり、兄弟、父、mehekitanga は社会的な非難と嘲笑に晒されることになる。そのような場合、通常の tapu の関係が棄却され、兄弟あるいは父が、姉妹の居住空間に立ち入り、当事者を激しく殴打することも珍しくない。隣接するサモアにおいては、親族集団、aiga の内と外で、処女性のもつ意味は全く異なっており、aiga の外の男性はそれを攻撃の対象とし、aiga 内の男性はその防衛にあたるという関係性が認められる。トンガにおける famili の内と外のゲームにも似た攻防も、基本的には、サモアとそれと同一であると言える。ただし、トンガの famili は、サモアの aiga よりもはるかに小さな親族集団ではあるが。

famili の外の青年の ta'ahine への攻撃は、しばしばナイト・ダンスのあとにおこる。famili の成員の監視を潜って、ta'ahine を獲得することが、トンガの青年の男らしさの見せ所であると考えられている。あるインフォーマントは、夜には、昼の道徳 (anga) は消えてしまい、熱情 (loto) が襲ってくると述べた。この発言にも見られるように、性的行為に関しては、夜と昼が anga/loto の対立として扱われていると言えるであろう。

V pule

性的なアバンチュールは、tu'a (平民) の青年にとって重要な意味をもっているだけではなく、首長、'eiki の生活において、より大きな比重を占めている。'eiki は、儀礼のコンテキストにおいては、理想的な行為のモデルを表現しているが、mohenga のコンテキストにおいては、tu'a 以上に「アクティブ」な性的活力をもっていると考えられている。実際、'eiki には、高い地位と経済力を背景として活発な性行動を展開する傾向性が認められる。「ガールフレンズ」の数は、'eiki の活力の証と考えられている。そこで、'eiki は、「ガールフレンズ」の数を互いに競いあうことになる。

以上のような taupoou の強調と活発な性行為の展開との対照は、単なる二つの基準の使いわけではなく、構造化された文化モデルの発現とみることができるであろう。女性、fefine の基本的な属性は、fanau'i (ファータリティ、出産) であり、文化モデルの中では、fanau'i の力をコントロールしていくことに力点が置かれていると言える。このコントロール (pule)こそが、「女性であること」の重要な条件となっている。他方、男性、tangata の基本的属性は、anga (文化) であるが、文化モデルの中では、fefine とは逆に、anga の枠内で活発な熱情、すなわち loto を表現していくことが、「男であること」の証であると表象されている。青年の性的アヴァンチュールの追求や 'eiki の活発な性行動は、このような意味での loto の発現として解釈することができるであろう。男性、tangata と女性、fefine の関係を理解する鍵は、pule にあると思われるが、tangata と fefine では、pule の作用の仕方 (自己実現のベクトル) が逆になっていると言える。そこで、次に loto のコントロールという問題に言及しておくことにしたい。

トンガにおいては、pule (コントロール) は、世界の秩序の構成と維持を考える際の基本的な概念となっているが、fefine の地位について語る場合にも、それは重要な意味をもってくる。トンガにおける女性のカテゴリーの格づけに関しては、pule の状態に置かれている女性に最も高い価値が

与えられるので、tamaha、あるいはより一般的には tuofefine が理想的な女性のモデルとなる。逆に、pule から外れた女性は、ディバリュエイトされ、放縦な性関係に溺れている女性 (muitau) はもう一方の極に位置づけられる。十分に配慮された婚姻、とりわけ、政治的操作という観点からおこなわれる王家や高位の首長間の婚姻連帯は、pule のもとに置かれているので高い価値が与えられ、こういった婚姻関係から生れてきた子供の体内には、toto malohi (強い血) が流れていると言われる。他方、ナイト・ダンスやその他の機会に、一時的な loto の支配によって生じたアバンチュールの結果生れてきた子供は、tama'aeuta (ヤブの中の子供) と呼ばれ、マイナス価値が与えられる。このように、fefine のファティリティに対する pulé の存在と非在によって、fefine は、tamaha あるいは tuofefine と miutau の両極的なカテゴリーに分類されることになる。さらに、婚姻のあり方によって、別の二つのカテゴリーがつくりだされる。夫方と妻方の間の婚資の交換、カバ儀礼、教会での結婚式、婚姻の届出といった一連の手続を経た婚姻は、常に pulé のもとに置かれており、こういった婚姻をおこなった女性は、fine'eiki と呼ばれ、尊敬の対象となる。しかし、駆け落ちは、かなり頻繁に起るのではあるが、姉妹の兄弟からの非合法的な奪取という pulé からの逸脱を意味しているので、低い価値しか与えられない。とはいえ、兄弟も、姉妹だけではなく、妻 (mali) を必要としており、しかも、妻を見つけることは現実には決して容易ではないので、しばしば、駆け落ちした当事者の男性と兄弟あるいは父親が交渉をおこなって、婚姻が了承されることが多い。このようにして成立した婚姻は、mali hola と呼ばれ、正規の婚姻よりも低く評価される。

以上のように、pulé の存在と非在によって、pulé(+)/pulé(-) の2つのカテゴリーを認めることができ、pulé(+) のカテゴリーに、tamaha 及び fine'eiki、pulé(-) のカテゴリーに malihola と miutau が位置づけられていると解釈することができる。さらに、これらのカテゴリーの類別は、姉妹の優越と妻の従属とのアンビバレントな関係とも密接に関連している。Gailey は、トンガにおける女性の地位の低下を国家論の枠組の中で論じ、姉妹の優越 (mehekitanga の優越を含む) によって特徴づけられる18世紀末の親族社会から階級が析出され、それに続いて進行した国家形成の過程の中で、男性による土地、権力、家族の私有化が進展し、同時に、女性は、優越する姉妹から従属する妻へと、その地位を低下させていったことを強調している。⁹⁾ 筆者も、19世紀前半に進行した立憲君主制国家の確立のプロセスの中で、社会・文化的制度の再編成が進行し、結果として女性の政治・経済的な地位の低下 (とりわけ、貨幣経済の浸透に伴う女性の交換財生産の役割の低下) が助長されていったことは認めたいと思う。しかし、再編成された社会・文化的制度の枠の基底には、文化モデルが、変換されながら持続しているのであり、Gailey の捉え方は図式的・制度論的すぎると言えよう。姉妹の優越は、現在のトンガにおいてもなお支配的であり、新たに生成された貨幣経済の論理と姉妹の優越との間の構造矛盾に目を向ける必要があるであろう。妻の従属と姉妹の優越との鋭い対照も、こういった構造矛盾の現れとして理解することができる。

ところで、現在のトンガにおいて顕著に認められる姉妹／妻の対立を先の女性のカテゴリーの分類と関係づけるならば、図1のように整理することができるであろう。

図1 女性のカテゴリー：姉妹の優越と妻の従属

		sister	wife
anga	tuofefine (tamaha)	+	-
	fine'eiki	+	(+)
Loto	mali hola	(+)	+
	miutau	-	+

図1のように、angaにおける女性の中心のカテゴリーは、tuofefine であり、妻としての従属は非在である。その対極に位置するカテゴリーが miutau であり、tuofefine とは逆に、姉妹の優越が非在である。中間の fine'eiki と malihola には、姉妹の優越と妻の従属がともに存在しているが、このどちらが強調されるかはコンテキストに依存している。

tuofefine と mali の対立は、次の事例が示しているように実際の社会生活においても厄介な問題を生みだしている。

〈事例1〉

L氏は、1982年の調査時に72歳であった。L氏は、50年以上に亘って毎週土曜日に、片道6マイルの距離を徒歩で妹の婚家に通い、贈物を届けてきた。L氏の妻は、L氏が妹の婚家に贈物を持っていくたびに苦情を言い立て、L氏と口論をした。そのような妻に対して、L氏はきわめて冷淡で、時には暴力をふるうこともあった。

〈事例2〉

1988年の調査時に、N氏は42歳のタクシー運転手であった。ある日、N氏は、「洗濯をしない」と言って、妻を詰った。二人の間で口論が始まり、妻は以前から対立していたN氏の姉の性格を口論の中でけなした。怒ったN氏は、妻の髪をつかんで家の周囲を引き回した。騒ぎを聞いて駆けつけてきた近所の人々の仲裁でその場はおさまったが、この出来事の直後に、妻は生家に逃げ帰った。しばらくして、妻の兄がやって来て、「妹を大切にせよ」と圧力をかけた。しかし、N氏はこれを拒絶した。それ以後、N氏の妻は、ニュージーランドへ渡り、帰国しようとしない。現在、N氏と妻の兄の間で、離婚をめぐる協議が進行中である。

〈事例3〉

ヌクアロファで、3軒の貸家の経営をおこなっているM氏は、約25年間、ニュージーランドで大工として働いてきたが、1986年にトンガに帰って来た。M氏の専らの関心は、蓄財であり、親族関係を蔑ろにしてきた結果、親族との間の摩擦が昂じていった。特に、姉妹との葛藤は深刻であり、経済的援助を求めて来た妹を拒絶したことで、近隣の人々の不評をも買うことになってしまった。しかし、M氏は、姉妹を拒絶し続け、妻と二人で営利に専念する道を選択している。

以上の事例からも窺えるように、姉妹／妻の対立は、現在のトンガにおける深刻な社会問題の一つであり、貨幣経済の浸透によって、この構造矛盾は助長され、新たな様相を呈しはじめている。

VI lolenga

社会生活のコンテクストにおける男性と女性の行為の様式の差異は、lolenga という言葉によって表現される。lolenga における男性 (tangata) と女性 (fefine) の顕著な差異は、伝統的な役割分担 (va'ifaiva) の区別である。男性の生業における主要な役割は、'uta (農耕地) での農作業と moana (深海) での漁撈である。女性の主要な役割は、家屋 (fale) の中でおこなわれる調理、洗濯、来客のもてなし、掃除、それにタパ布、マット、バスケットの製作等の装飾的工作であるが、必要に応じて、'uta の草取りや海岸での貝やナマコの採取に従事することもある。こういった va'ifaiva の区別に関して、トンガの女性の中には、男は汚くて辛い仕事をおこない、女は文化的で軽い仕事をおこなうので、女のほうがかはるかに恵まれていると述べる人が多い。男性の多くも、この点を認める傾向が見られる。このような意味において、本来の基本的属性とは別に、志向性という観点から見ると、男は自然 (loto)、女は文化 (anga) に関ると言えるかもしれない。va'ifaiva の区別に関するより重要な問題は、男性よりも女性のほうに、より大きな行動の自由が認められているという事実である。女性が 'uta での耕作をおこなったり、リーフで漁撈をおこなっても、然したる非難をうけないが、男性がタパ布やマットの製作をおこなうと物笑いの種になる。男性は、lolenga のレベルでは、文化コードへの同調を強く求められているのである。

lolenga における男性の顕著な同調性と女性の相対的自由は、服装に関しても認められる。たとえば、vala (腰巻) を着けるとき、通常、男性は、結び目を表に出し、余った部分を前に垂らしておくが、女性は、結び目を隠し、余った部分を内側にきっちりと巻き込む。しかし、女性が男性のように vala の余った部分を前に垂らしておいても、他者の関心を引くことはない。ところが、男性が余った部分を内側に巻き込んでおくと、それは嘲笑の対象となってしまう。こういった文化コードからの女性の相対的自由は、歌、話法、踊りにおいてもはっきりと認められる。

VII おわりに

19世紀後半に立憲君主制国家の基礎が確立されて以来、トンガでは、ヨーロッパ文化の選択的受容を通して形成された「compromise culture」が相対的な安定を保ってきた。しかし、近年、現国王ツポウIVの積極的な近代化政策によって、トンガの社会-文化的諸制度は急速に変貌しつつある。種々の変化の中でも、当面の行論において特に注目すべき現象は、教育制度の拡充を媒介とする顕著な女性の社会進出である。過去10年間に、オーストラリア、ニュージーランドの大学への留学制度が整備され、スカラシップも、その種類と額において大幅に改善されていった。留学制度の整備に加えて、1980年代前半、南太平洋大学の分校とアテネシ大学の発足によって、従来存在しなかった高等教育機関がトンガに設立されることになった。こういった高等教育制度の拡充にともなって、女性の大学進学率もコンスタントに上昇していき、1988年現在、オーストラリア、ニュージーランドの大学への留学生の約45%は女性である。学士や修士を得た女性の多くがトンガ政府に採用され、既に各省庁のダイレクターになっている女性も少なくない。トンガ政府の外郭団体や主要な企業の要職に就いている女性を加えるならば、トンガにおける女性の社会進出はかなり顕著な現象であると言える。

このようなトンガにおける女性の社会進出は、何によってもたらされたものであろうか。種々の要因が考えられるとはいえ、先に述べた男性と女性の関係をめぐる文化モデルがこの現象と決して無関

係ではないことを指摘しておきたい。男性は、'eiki の活発な性的活力や青年のアバンチュールの追求に見られるように、loto の領域においては無徴であるが、anga の領域においては、文化コードへの同調性を強く求められ、新しい状況への自由な対応が困難である。これと対照的に、女性は、ファティリティの統制に示されるように、loto の領域において統制 (pule) に服しているが、生業、服装、話法、踊り等におけるコードからの相対的自由に窺うことができるように、anga の領域においては無徴であり、新しい状況に対しても比較的に容易かつ柔軟に対応することができる。このような anga の領域における無徴性は、女性の高等教育機関及び社会への進出という伝統的コードから外れた行動様式の許容と密接に関連していると思われる。さらに、兄弟 (tuonga'ane) の姉妹 (tuofefine) に対する積極的な援助も、女性の社会進出を促進していると考えることができる。

トンガにおける顕著な社会進出は、「トンガにおける女性の地位は高い」という一般的常識を補強するものである。しかし、一方では、Gailey が指摘しているように、国家形成のプロセスの中で進んできた女性の従属化も、図式的解釈には難点があるとはいえ、事実としては否定することはできない。今後、女性の社会進出という新しい現象が、女性の従属化のプロセスおよびそれに起因する姉妹／妻の構造矛盾をどのように組み変えていくかという問題は、追跡に値する課題であるように思われる。

国

- 1) Martin, Jhon, 1818. An Acconut of the Natives of the Tonga Islands, compiled and arranged from the extensive communications of Mr. William Mariner, several years resident in those islands. 2 vols. London, John Murray. Second Edition.
- 2) Gifford, Edward W., 1929. Tongan Society. Honolulu, Bernice P. Bishop Museum Bulletin, 61.
- 3) Bott, Elizaveth, 1972. Tongan Society at the time of Captain Cook's visits: Discussions with Her Majesty Queen Tupou, Polynesian Society Memoir 44.
- 4) Korm, Schulamit R. Dector, 1974. "Tongan Kin Groups: The Nobles and the Common View." Journal of the Polynesian Society. 83: 5-13.
- 5) Rogers, Garth, 1977. "The Farther's Sister is Black: A Consideration of Female Rank and Powers in Tonga." Journal of the Polynesian Society, 86: 157-82.
- 6) Shore, Bradd, 1982. Sala'ilua: A Samoan Mysterty. Columbia University Press.
- 7) Ortnor, Sherry, 1981. Gender and Sexuality in Hierarchical Societies, in Sexual Meanings. Cambridge Univ. Press.
- 8) Gailey, Christine Ward, 1987. Kinship to Kingship: Gender Herarchy and State Formation in the Tongan Islands. Austin, Texas University Press.
- 9) ibid., pp. 208~211.